

助動詞マシに共起する助詞モの位置づけ

小池 俊希

一 はじめに

助詞のはたらきを検討するうえで、構文的環境により用例をおおまかに切り分けるといふ研究方法がある。本稿が検討対象とする助詞モについても、そのような研究方法が採られた先例があり（工藤（一九六三）・吉田（一九九〇）・森野（一九七七・一九九八）など）、とくに文末の表現が構文的環境として重要視されてきた。

しかしながら、ある構文的環境に着目した際に、その環境をほかのいずれの環境と結びつけるべきか、判断しかねるところがある。本稿では、そのような構文的環境として、助動詞マシを取り上げる。

「マシ」を有する文には、しばしば「モ」が用いられることが知られる。

(1) a 妹が家も継ぎて見ましを「妹之家毛継而見麻思乎」

大和なる大島の嶺に家もあらましを「家母有狻尾」

(万葉二・九二)

b 出でて行く道知らませばあらかじめ妹を留めむ塞も置かましを「塞毛置末思乎」 (万葉三・四六八)

「マシ」は、一般に「反実仮想」を表す語と解され、しばしば意志・推量の助動詞の一群に配される。そのため、構文的環境から助詞モを整理する研究では、「ム」や「ベシ」などと同一類型として、「マシ」と共起する「モ」の語性が検討されてきた¹⁾。

その一方で、諸研究に指摘されるように、「マシ」は多くの用例で仮定条件節を伴う。あるいは、「……マセバ……マシ」のように仮定条件節内にも用いられる。助詞モは、「鹿玉の寸戸が竹垣編目ゆも妹し見えなば」(万葉十一・二五三〇)の如く、仮定条件節内に用いられるため、「……モ……マシ」と「……モ……仮定条件」との間に共通する性質を見出しうる可能性も否定できない。

また、「マシ」は、希望の意が色濃く汲みとられる表現で

あり、希望表現のひとつと見做す立場もある(2)。とくに、助詞モの用法を整理した浅見(一九六六)は、「願望・希求および強い意志をあらわすような歌の場合に、(中略)その対象を『せめてくだけでも』と指示する働きをになう」(八七頁)としており、「マシ」を希望表現の近くに位置づける。以上のように、助動詞マシは意志・推量表現とも、仮定条件とも、あるいは希望表現とも密接な関係を有する。したがって、いずれかひとつの構文的環境を足掛かりに、「マシ」に共起する「モ」のはたらきを推定することはできかねる。そこで、「モ」のはたらきの再検討を通じて、「……モ……マシ」の構文的環境を位置づけてゆきたい。

用例の分析に先立ち、「……モ……マシ」の「モ」に対する、先学の解釈を整理する。

「マシ」を意志・推量の助動詞と見做す立場からは、「モ」は多く(最小限度)と解される(3)。(最小限度)とは、最小限望ましい事態を提示することで、より望ましい事態をも含意する用法を指す。「後にも逢はむ」が「今も後も」ではなく、「今ハ逢エナクトモ」せめて後には「を」を表すことを典型として、たしかに意志・推量の助動詞と共起する「モ」が(最小限度)を表すことは少なくない。

(2) a 一瀬には千度障らひ行く水の後にも逢はむ後毛将相「今にあらざとも」(万葉四・六九九)

b ……なでしこが その花妻に さ百合花 ゆりも

逢はむと「由利母安波無等」慰むる 心しなくは天離る 鄙に一日も あるべくもあれや「比奈尔一日毛安流へ久母安礼也」(万葉十八・四一三三)

また、前述のように、浅見(一九六六)は、「マシ」を希望表現の近くに位置づけつつも、(最小限度)の用法を認める。ただし、希望表現に共起する「モ」が(最小限度)を表すのは、実現可能性の高い事態を提示する希望表現に限られるため(小池(二〇一三a)、検討の余地がある)。

なお、仮定条件と結びつけて「……モ……マシ」の「モ」を解釈する論考は管見のかぎり見当たらないが、後述のように、仮定条件節内の「モ」もまた、もっぱら(最小限度)にはたらく。

「マシ」に共起する「モ」を(最小限度)とする立場は、注釈書類にも多く認められる。冒頭に掲げた(1a)の歌に立ち返ると、『代匠記(精選本)』に「妹力住家ヲタニ」と抄されて以来、『旧全集』・『新潮集成』・『新全集』・『和歌大系』・『全解』などにおいて、(最小限度)のはたらきが指摘される。なお、当該歌の詳細な解釈に関しては、三・一にて後述する。その一方で、「マシ」に共起する「モ」に詠嘆性を認める指摘もあり(4)、「……モ……マシ」の「モ」に(最小限度)以外の説明を与える余地は残されているように思われる。

以上を小括する。まず第一に、「モ」を整理するうえで、

構文的環境としての「マシ」の位置づけは不明瞭である。そして第二に、「マシ」に共起する「モ」は、通説では「最小限度」と解されるが、その妥当性には再検討の余地がある。そこで、本稿では、上代における「マシ」の文型を整理したうえで、「マシ」に共起する「モ」のはたらきを再検討する。そして、「モ」の構文的環境としての「マシ」の位置づけを再考してゆく。

なお、上代から中古にかけて「マシ」のはたらきが変化することが指摘されるが（栗田（二〇一九）・古川（二〇一九）など）、本稿では、上代の用例のみを対象とする。

二 助動詞マシの整理と助詞モの共起

助動詞マシと助詞モの共起の様相を調査するうえで、まず、「マシ」の文型を整理する。上代の「マシ」には、おおむね下記の三種の文型が認められる。

- (3) a 仮定条件節内の「マシ」
- b 仮定条件節を伴う「マシ」
- c 仮定条件節を伴わない「マシ」

以下では、右の三種の文型について、それぞれ「モ」との共起を確認する。

二・一 仮定条件節内の「マシ」

上代において、「マシ」が仮定条件節内に用いられる文型には、つぎのようなものがある。

- (4) a 大船に妹乗るものにあらませば「大船尔伊母能流母能尔安良麻勢婆」羽ぐくみ持ちて行かましもの

（万葉十五・三五七九）

b かくばかり恋ひむとかねて知らませば「古非牟等可祢豆之良末世婆」妹をば見ずそあるべくありける

（万葉十五・三七三九）

(4 a) は、典型的な「……マセバ……マシ」の文型である。上代に一二例が見出されるものの、いずれも仮定条件節内に「モ」は共起しない。さらに、(4 b) のように、後件に「ベシ」を含む例は、当該例と、読添え例の「かくばかり恋ひむもの」と知らませば「知者」遠くも見べくありけるものを（万葉十一・二三七二）との二例を数えるのみであるが、こちらも「モ」は共起しない。また、上代では、いずれも「マセバ」の形で用いられ、「マシカバ」の形は認められない。

なお、つぎのような例で、仮定条件節内に「モ」が用いられる点には注意が要される。

- (5) a 妻もあらば「妻毛有者」摘みて食けまし沙弥の山野

の上のうはぎ過ぎにけらずや（万葉二・二二二）

b 旅にして物恋之鳴毛聞こえざりせば「不所聞有世者」恋ひて死なまし」
(万葉一・六七)

いずれも「マシ」を用いずに、(5a)は「未然形十バ」、(5b)は「セバ」によって仮定条件節を構成しており、後件にのみ「マシ」が用いられる。これらの例においては、仮定条件節内に「モ」が現れるのである。なお、後者の二・三句目には脱字を想定する必要があるものの、「毛」字は助詞モを表す蓋然性が高かるう。当該歌に関しては、三・二に後述する。

二・二 仮定条件節を伴う「マシ」

つづいて、仮定条件節を前件として、その後件に「マシ」が用いられる文型を整理する(5)。以下、仮定条件節に波線を付す。

(6) a なかなか人にあらずは桑子にもならましものを
「桑子尔毛成益物乎」玉の緒ばかり
(万葉十二・三〇八六)

b 多遅比野に寝むと知りせば防壁も持ちて来ましもの
「多都碁母母母知互許麻志母能」寝むと知りせば
(記・七五)

c 出でて行く道知らませばあらかじめ妹を留めむ塞も置かましを「塞毛置未思乎」
(万葉三・四六八)

d 暇あらばなづさひ渡り向つ峰の桜の花も折らましものを「桜花毛折未思物緒」
(万葉九・一七五〇)

順に、「……ズハ……マシ」、「……セバ……マシ」、「……マセバ……マシ」、「その他仮定条件……マシ」の文型である。これらの文型には、いずれも後件に「モ」との共起が認められる。また、「マシ」につづいて「ヲ」や「モノヲ」などの助詞が多く付されるが、本稿ではその有無は考慮しないこととする。

なお、「……ズハ……マシ」の文型には、単純な仮定条件を表すものと、いわゆる上代特殊語法のものがあることが知られる(小柳(二〇〇四)・古川(二〇一八)・栗田(二〇一九)など)。

(7) a はじめより長く言ひつゝ頼めすはかかる思ひにあはましものか「如是念二相益物歟」(万葉四・六二〇)
b 後れ居て恋ひつゝあらずは田子の浦の海人ならましを「田籠之浦乃海部有申尾」玉藻刈る刈る
(万葉十二・三二〇五)

すなわち、(7a)は、「はじめから頼りにさせなければ、このように嘆くことはなかった」として、単純な仮定条件に解釈できる。それに対して、(7b)は、「後に残されて恋い慕うよりはいつそのこと、田子の浦の海人になりたい」とする。これがいわゆる上代特殊語法であり、小柳(二〇〇四)の指摘するところの、「逆行」が見てとれる。「……

ズハ……マシ」の文型は、上代に二一例が見出され、うち一八例が上代特殊語法と考えられる。

二・三 仮定条件節を伴わない「マシ」

最後に、仮定条件節を伴わない「マシ」の文型を整理する。

(8) a しぐれ降る暁月夜紐解かず恋ふらむ君と居らまし

ものを「恋君跡居益物」 (万葉十・二三〇六)

b 我妹子は衣にあらなむ秋風の寒きこのころ下に着

ましを「下著益乎」 (万葉十・二二六〇)

c 後れ居て恋ひば苦しも朝狩の君が弓にもならまし
ものを「伎美我由美尔母奈良麻思物能乎」

(万葉十四・三五六八)

d 高光る我が日の皇子の万代に国知らさまし島の宮

はも「国所知麻之嶋宮波母」 (万葉二・一七二)

(8 a) のように、「マシ」を含む文が単独で用いられる場合もあるが、多くは(8 b・c)のように、他文と並置される。(8 b)は、「あなたに衣となつてほしい」と「秋風の寒いこの時分に下に着よう」とが並置されるが、意味関係上は、「あなたが衣となれば、下に着よう」の如く、前提条件とその帰結とに解することもできよう。(8 c)は、その反対である。古川(二〇一九)は、同歌に対して「仮に『苦しからざらまし』のように帰結(B)にマシを下接さ

せるよりも、『弓にもならまし』のように前提内容(A)にマシが下接した場合の方が、対象事態を強く望む、あるいはそれを意志するような表現になることは自然である」(四〇頁)とする。(8 b・c)いずれの文型にも、「モ」の共起を見出せるものの、後者に偏る傾向が認められる⁽⁶⁾。

さらに、さほど用例数は多くないが、(8 d)のように、「マシ」を含む要素が文でなく、連体修飾節や準体言となる例も散見される。用例数の事情もあるが、そのような文型には、「モ」との共起は認められない。

二・四 用例分布

以上、二・一から二・三に整理した文型について、総用例数と助詞モの共起する用例数とを整理して、助詞モの共起する割合を表1に示す。

表1 助動詞マシの文型と助詞モの共起

	モと共起する用例数	総用例数	モと共起する割合
……マセバ ……マシ	0	12	0.0%
……マセバ ……マシ以外	0	2	0.0%
……ズハ ……マシ(通常)	0	3	0.0%
……ズハ ……マシ(特殊)	8	18	44.4%
……セバ ……マシ	7	39	18.0%
……マセバ ……マシ	4	13	31.0%
……その他仮定条件 ……マシ	6	21	28.6%
……マシ	11(1)	43	25.6%

*助詞モについては、用例数を示したのち、そのうちの読添えの用例数を()内に示す。

*割合は、読添えを含めて計算する。

三 助動詞マシに共起する助詞モのはたらき

前節の整理をふまえて、上代において助動詞マシに共起する助詞モのはたらきを考える。まずはじめに、従来の研究や諸注釈書にて多く指摘される、「最小限度」のはたらきについて検討する。

三・一 〈最小限度〉の妥当性

上代においては、助詞モが最小限の事態を指し示すことで、それよりも望まれる事態すべてを含蓄することがある。この際、「モ」は、「セメテ……ダケデモ」、あるいは否定文などでは「……サエ」のように現代語訳される。

(9) a 玉津島磯の浦廻の砂にも|ほひて行かな「真名子
仁文尔保比弓去名|妹も触れけむ
(万葉九・一七九九)

b 一瀬には千度障らひ行く水の後に|逢はむ|後毛
将相|今にあらざとも
(万葉四・六九九)

c 家に行きて何を語らむあしひきの山ほととぎす一
声も|鳴け|「音毛奈家」 (万葉十九・四二〇三)
〈最小限度〉の意を汲みとりやすいのは、(9a)のような実現可能性の高い事態を提示する希望表現と共起する場合や(小池(二〇二三a))、「後(三)モ……ム」のような文型である(大野(一九九三)・森野(一九九八)など)。

前述のように、この〈最小限度〉のはたらきは、「マシ」と共起する「モ」にもしばしば指摘されてきた。

(10) a 妹が家も|継ぎて見まし|を「妹之家毛継而見麻思乎」
大和なる大島の嶺に家も|あらまし|を「家母有猿尾」
(万葉二・九一)

b かくばかり恋ひつつ|あらざは石木にも|成らまし|も

のを「石木二毛成益物乎」物思はずし

(万葉四・七二二)

(10 a) は、(1 a) の再掲である。天智天皇の鏡王女に賜う御歌であり、諸注釈書が〈最小限度〉のはたらきを指摘することは前述のとおりである。「あなたの家だけでもいつも見られたらよいのに」『新全集』という現代語訳に、「直接はあなたに逢えなくとも」のような歌意を補えば、たしかに〈最小限度〉のはたらきと解釈できる(こ)。ただし、結論を先に述べると、これは前提条件とその帰結に、あたかも望ましさのスケールが想定できるように見えるだけであり、〈最小限度〉とは認めがたい。

ここで、助動詞マシのはたらきを確認する。古川(二〇一九)は、「マシ」の構造をつぎのように整理する。

(11) 可能性Ⅰ Aである (Aゆえに) Bである
可能性Ⅱ Aである (Aゆえに) Bである

これを、「妹が家も継ぎて見ましを」(10 a) に当てはめると、つぎのようになる。

(10 a) あなたの家がいつも見えない↓あなたに逢えない
あなたの家がいつも見える ↓あなたに逢える

「妹が家も継ぎて見ましを」(10 a) は「A」に相当する。「あなたの家がいつも見える」のであれば、歌中に明示はされないが、その帰結として「あなたにいつも逢える」と読むことができよう。つまり、「(直接ハアナタニ逢エナクトモ)あ

なたの家だけでも、いつも見られたらよいのに」という読みは、「マシ」の意味構造をふまえると、成立しがたいように思われる。

また、(10 b) についても、「石か木にでもなる方がましだ」『新全集』という現代語訳が付されるように、〈最小限度〉の意が示唆される。たしかに、非情の事物として「石木」は最小限のものとも考えられようが(こ)、この類型にはつぎのような歌がある。

(12) 世の中は恋繁し多やかくしあらば梅の花にもならまし
ものを「烏梅能波奈尔母奈良麻之勿能怨」

(万葉五・八一九)

(12) は、いわゆる梅花宴の一首であり、「梅」は賞美すべき対象そのものである。「恋の苦しみから解放された世」がもつとも望ましい事態であるとしても、「恋の苦しみが見えない世」という前提条件の中では、むしろ「梅の花になること」はもつとも望ましい事態ではなからうか。

さらに、東歌ではあるものの、次の歌では、助詞モが〈極大〉にはたらくように解される。

(13) 明日香川堰くと知りせばあまた夜も率寝て来ましを
「安麻多欲母為妳互己麻思乎」堰くと知りせば

(万葉十四・三五四五)

このような用例で「モ」を〈最小限度〉と解するのであれば、「あまた夜」は「一夜」のような表現でなければならな

いだろう。

以上のように、「……モ……マシ」における「モ」を（最小限度）とする解釈には、その妥当性に疑問が残り、ほかに説明を求めるべきであるように思われる。

三・二 仮定条件節内の「モ」

助動詞マシに共起する助詞モに（最小限度）のはたらきを見出しがたいことの傍証として、仮定条件節に用いられる「モ」について検討する。

(14) a 妹が名も我が名も立たば「妹之名毛吾名毛立者」惜しみこそ富士の高嶺の燃えつつ渡れ

(万葉十一・二六九七)

b 九月の有明の月夜ありつつも君が来まさば「有乍

毛君之来座者」我恋ひめやも (万葉十・二三〇〇)

c 亀玉の寸戸が竹垣編目ゆも妹し見えなば「編目従

毛妹志所見者」我恋ひめやも (万葉十一・二五三〇)

d 玉敷ける家も何せむ八重むぐら覆へる小屋も妹と

居りてば「覆小屋毛妹与居者」 (万葉十一・二八二五)

(14 a) のように、〈並列〉のはたらきが顕著な例や、(14 b) のように、「モ」が仮定条件節に係るか、その後に係るか解釈しがたい例を除くと、「直接見ルコトハ叶ワナクトモ」竹垣の網目からでもあなたが見えたら」(14 c)、「(玉ヲ

敷イタ家デナクトモ) 蔓の這った小屋でもあなたと居れば」

(14 d) の如く、仮定条件節内の「モ」の多くは、〈最小限度〉に解することができる。これらの〈最小限度〉のはたらきは、三・一に示した「あなたの家がいとも見える／妹に逢える」(10 a') のように、前提条件とその帰結とに跨って望ましさをスケールを述べるのではなく、「直接見る／竹垣の網目から見る」のように、あくまで仮定条件節内で望ましさをスケールを述べるのである。

また、二・一にて指摘した、「マシ」の前件となる仮定条件節内に「モ」が用いられる(5 a・b) の例を再掲する。

(15) a 妻もあらば「妻毛有者」摘みて食げまし沙弥の山野の上のうはぎ過ぎにけらずや (万葉二・二二二)

b 旅にして物恋之鳴毛聞こえざりせば「不所聞有世者」恋ひて死なまし (万葉一・六七)

(15 a) は、人麻呂の石中死人歌である。直前の長歌末「玉梓の道だに知らずおほほしく待ちか恋ふらむ愛しき妻らは」(万葉二・二二〇) をふまえて、「妻ら」を「妻を含めた家族」と読めば⁹⁾、「(家族全員ハ叶ワナクトモ) せめて妻だけでも居合わせたら」と〈最小限度〉に解される。非妻帯者に対して、「妻がいれば」と反事実的な仮定を述べるわけではないのである。(15 b) も、『全注釈』とそれを承けた『注釈』の脱字説によって「物恋しきに鶴が音も」と訓むのであれば、家恋しさを慰める最小限のものとして「鶴が音」

を想定して、「(家ニ帰ルコトハデキナクトモ)せめて鶴の鳴き声だけでも聞こえたら」と解することができよう。

なお、参考までに、(15 a)の「マシ」の構造を示せば、つぎのようになる。

(15 a) 妻が居合わせない↓ともうはぎを食べられない
妻が居合わせる ↓ともうはぎを食べられる

帰結「ともうはぎを食べる」を導くための最小限の前提条件が「家族のうち妻が居合わせる」なのである。つまり、「最小限度」のはたらかきは、(10 a)のように前提条件とその帰結とに跨るものではなく、前提条件内に留まるものである。したがって、やはり「マシ」に共起する「モ」を〈最小限度〉に解すべき蓋然性は小さいように思われる。

三・三 詠嘆性の指摘

それでは、この構文的環境における助詞モのはたらかきを如何に解釈すべきであろうか。結論を先に示すと、この文脈における「モ」は、実現可能性の低い事態を提示する希望表現(L類の希望表現)に伴われる(詠嘆)由来の「モ」と語性を同じくするものと推察される。

(16) a 我が命も常にあらぬか「吾命毛常有奴可」昔見し象
の小川を行きて見むため (万葉三・三三二)

b 竜の馬も今も得てしか「多都能馬母伊麻勿愛互之

可」あをによし奈良の都に行きて来むため (万葉五・八〇六)

「L類の希望表現が提示する事態には、その実現可能性の低さから欠如感や不満感といった情意が伴われる。そのような情意を表現するために、L類の希望表現と助詞モとが強くひかれあった」(小池(二〇二三a)・七六頁)のであった。「マシ」が希望表現に近似することには、先学の指摘があり(前掲注2参照)、とくに、いわゆる上代特殊語法の後件では、「マシ」と同様に、この種の希望表現が用いられることがある。

(17) a なかなか人にあらずは桑子にもならましものを
「桑子尔毛成益物乎」玉の緒ばかり (万葉十二・三〇八六)

b なかなか人にあらずは酒壺に成りにてしかも
「酒壺二成而師鴨」酒に染みなむ (万葉三・三四三)

c 外に居て恋ひつつあらずは君の家の池に住むといふ鴨にあらましを「鴨二有益雄」(万葉四・七二六)

d 我が思ひかくしてあらずは玉にもが「玉二毛我」まことも妹が手に巻かれむを (万葉四・七三四)

(17 a・c)のように、「マシ」の前件が上代特殊語法と解される例は一八例認められ、うち八例に「モ」の共起が認められる。わずかばかり過半数に届かないものの、その共起率は、おおむねL類の希望表現と助詞モとの共起率に準じる

ものと考えられる。さらに注目すべきは、一八例のうち一三例がモノあるいは他人になる事態を望むことである(10)。

このような願いは、実現可能性の低い事態を提示する希望表現に顕著な特徴のひとつであった(小池(二〇二三a))。また、残る五例は「白露の消かもしなまし」(万葉八・二六〇八)の如く、この世から消えてしまいたいと望む。このような悲痛な願いにおいて、欠如感や不満感といった情意に与る(詠嘆)由来の「モノ」が用いられたことには、得心がゆこう。

三・四 「マシ」の希望と推量

以上、三・一と三・二にて、助動詞マシに共起する助詞モに〈最小限度〉のはたらきを認めたい旨を述べ、三・三にて、実現可能性の低い事態を提示する希望表現に伴われる助詞モと同様に、(詠嘆)由来のはたらきを認めるべき旨を述べた。「……ズハ(上代特殊語法)……マシ」に「モ」が共起しやすしい理由についてはすでに論じたため、残る文型について考察してゆく。

まず、仮定条件節内の「マシ」であるが、二・一に述べたように、「……マセバ」に「モ」が共起する例は見出されな^い。これは、仮定条件節内の「モ」が〈最小限度〉にはたらしやす^いことに起因すると推される。

(18) 人言の繁き時には我妹子し衣にありせば[吾妹衣有]

下に着ましを

(万葉十二・二八五二)

たとえば、(18)は、「我妹子が衣であれば」と仮定する。前述のように、ヒトがモノになる事態を提示する際には、(詠嘆)由来の「モ」が用いられやすいが、その一方で、仮定条件節内という環境では、「モ」は〈最小限度〉に解されやすくもある。このような事情により、仮定条件節内では、「マシ」と「モ」との共起が避けられたものと考えられる。つぎに、「ズハ」以外の仮定条件節を伴う「マシ」の文型を検討する。表1に示したように、この文型には「モ」との共起こそ認められるものの、共起率は二割超とそれほど大きくない。

(19) a 世の中は恋繁し^るやかくし^らあらば梅の花にも^らなら
ましものを「梅能波奈尔母奈良麻之勿能怨」
(万葉五・八一九)

b 人言の繁き^このころ玉ならば^手に巻き持ちて恋ひ
ざらましを「手尔巻以而不恋有益雄」
(万葉三・四三六)

c 高^光る我が日の皇子のいまし^せば島の御門は荒れ
ざらましを「嶋御門者不荒有益乎」(万葉二・一七三)
(19 a)は、(12)の再掲である。「マシ」によってモノとなる望みを提示する例であり、三・三に検討したように、実現可能性の低い事態に対する不満感や欠如感を表すために、「モ」が共起しえたものと考えられる。

その一方で、(19 b)は、「あなたが玉であれば、手に巻きつけて、逢えず苦しい思いはしなかるうに」と、モノとなる事態を前提条件とする。このようになると、「マシ」が用いられる後件はあくまで前提条件から導かれる帰結にすぎず、希望の意を汲みとりがたい。日並皇子舎人慟傷歌群のうちの一首である(19 c)も、「草壁皇子が存命であれば、島の宮は荒れなかつたであろうに」とする。挽歌であることをふまえると、望むべきはむしろ前提条件の「草壁皇子が存命であること」であり、後件は前提条件から導かれる帰結に留まる。また、上代特殊語法でない、通常の否定仮定条件としての「……ズハ……マシ」には助詞モが共起しない。三例のみであるため、全例を掲げる。

(20) a 相見ずは恋ひざらましを「不恋有益乎」妹を見ても
となかくのみ恋ひばいかにせむ(万葉四・五八六)

b はじめより長く言ひつつ頼めずはかかる思ひにあ
はましものか「如是念二相益物歟」

c ま梶貫き船し行かずは見れど飽かぬ麻里布の浦に
宿りせましを「麻里布能宇良尔也杼里世麻之乎」

(万葉十五・三六三〇)

「逢いさえしなかつたら、恋い慕うこともなかつたであろうに」(20 a)の如く、この文型の「マシ」は、「現実でない事態や心象を思い描き推量する用法である」(古川(二〇一

八)……七一頁)。つまり、前述の(19 b・c)と同様に、「マシ」が用いられる事態に希望の意を汲みとりがたく、そのために「モ」が共起しないのであろう。

つづいて、仮定条件節を伴わない「マシ」の文型を検討する。この文型も「モ」の共起率は二割超に留まるが、「モ」が共起しがたい理由は、「ズハ」以外の仮定条件節を伴う「マシ」の文型と同様であらう。

(21) a 後れ居て恋ひば苦しも朝狩の君が弓にもならまし
ものを「伎美我由美尔母奈良麻思物能乎」

(万葉十四・三五六八)

b 我妹子は衣にあらなむ秋風の寒きこのころ下に着
ましを「下著益乎」

(万葉十・二二六〇)

c なかなかに黙もあらましを「中々者黙毛有益乎」な
にすとか相見そめけむ遂げざらまくに

(万葉四・六一二)

d 悔しくも満ちぬる潮か住吉の岸の浦廻り行かまし
ものを「岸乃浦廻従行益物乎」(万葉七・一一四四)

(21 a・b)は、ともにモノとなることを望む類型である。ただし、「モ」の共起する(21 a)がその望みを「マシ」で表すのに対して、(21 b)はその望みを希望表現が担い、そこから導かれる「衣デアッタラ」下に着よう」という帰結を「マシ」が担う。

以上のように、「ズハ」以外の仮定条件節を伴う「マシ」

の文型、および仮定条件節を伴わない「マシ」の文型には、「マシ」が実現可能性の低い事態の希望にはたらく用例と、「マシ」に希望の意を汲みとりがたい用例とが混在している。そのため、「……ズハ（上代特殊語法）……マシ」に比して、助詞モの共起率が小さいものと推される。

四 おわりに

本稿では、助動詞マシに共起する助詞モについて、そのはたらきを考察した。そして、この「モ」に〈最小限度〉のはたらきを認めがたく、「ヌカ（モ）」や「（テ）シカ（モ）」などの希望表現と共起する場合と同様に、実現可能性の低い事態に対する欠如感や不満感といった情意を表す、〈詠嘆〉由来のはたらきを認めるべきであると結論づけた。

なお、希望表現と助詞モの共起関係を考察した小池（二〇二三 a）においては、「マシ」を希望表現に含めていない。その理由は、本稿の冒頭に述べたように、「マシ」が複数の構文的環境に跨っており、希望表現以外の構文的環境の影響を受ける可能性を否定できなかったためである。つまり、本稿は、小池（二〇二三 a）を補完する意味合いも有している。

最後に、残された課題を述べる。本稿では、上代を検討対象としたが、中古における用例は、やや様相を異にする。

（22） a 夢地にも宿貸す人のあらませば寢覚に露は払はざ

らまし（後撰・七七〇）

b 案におつることもあらましかば、いと口惜しくね
ぢけたらまし（源氏・藤袴）

一例を挙げると、（22 a・b）のように、仮定条件節内の「マシ」に「モ」が共起する例が少なからず見出される。また、小池（二〇二三 b）にて指摘したように、漢文訓読文においては、「マシ」と「モ」との共起を見出しがたく、文体差にも留意する必要があると推される。いわゆる「ためらい」を表す用法が成熟するなど、上代から中古にかけての「マシ」の意味変化をふまえたうえで、それに共起する「モ」にもまた意味変化が認められるか否かについては、さらなる検討が要される。

【注】

（1）工藤（一九六三）や吉田（一九九〇）、森野（一九九八）の整理は、いずれも「マシ」を意志・推量の助動詞に含める。小池（二〇二二）においても、同様の立場を採り、共起する「モ」に〈最小限度〉の意を認めたが、本稿では、その妥当性を再考する。

（2）希望表現を整理した濱田（一九八六）は、仮定条件節、および「マシ」に後接する「（モノ）ヲ」に「現在の事実に対抗の事を仮定する」（二一四頁）機能を求め、「マシ」自体は願望の意を表すとする。また、山口（一九六八）は、「マシ」を「推量」と「意志（希望）」とに大別できることを指摘する。それらを承けた栗田（二〇一九）や古

川(二〇一八・二〇一九)も、「マシ」に推量と希望との意があることを認める。

(3) 森野(一九九八)が「最低・最小限度の対象を『も』がとりたる用法」(六〇頁)としたほか、工藤(一九六三)や大野(一九九三)は、助詞モの根底に不確定や不安を認めつつ、「最小限度」のはたらしを示唆する。なお、吉田(一九九〇)が「意志・願望・命令文内」における助詞モ共起の根拠として掲げた、「実現を期待される事態というものが、可能性を分有する他の事態たちとの並立関係を免れていない」(二三頁)という性質は、古川(二〇一九)の結論づける「対象事態を可能性として提示し、かつ、別の可能性と比較する」(三六頁)という「マシ」の意味に合致する。ただし、吉田氏は、「マシ」と共起する「モ」の語性について『あの時こうしておいたら…』という後悔の念をもって、過去の或る時点においては選び得たはずの選択肢の一つを提示する(同頁)とも言及するが、挙例される(1b)の家持亡妾挽歌の一首は、「黄泉への道筋を知っていたならば、妻を留める関所を置いたのに」と、とうてい実現不可能な事態を仮想する。これを「選び得たはずの選択肢」と解することができるかには疑問が残ろう。

(4) 一例を挙げると、「神風の伊勢の国にもあらしを」(万葉二・一六三)について、『釈注』は『も』は詠嘆で、下の反実仮想の『ましを』と呼応する」と解釈する。

(5) 「古に梁打つ人のなかりせば(こにもあらし)柘の枝はも」(万葉三・三八七)のように、「マシ」を含む要素が終止せずに連体修飾

節となる例や、「松人にありせば太刀佩けましを衣着せましを」(記・二九)のように、ひとつの仮定条件節に複数の後件を想定する例についても、この文型に含める。ただし、「後れ居て恋ひは苦しも朝狩の君が弓にもならましものを」(万葉十四・三五六八)については、仮定条件節が「苦しも」のみに係るものとして判断し、「仮定条件節を伴わない『マシ』」に含める。

(6) 帰結に相当する部分に「……モ……マシ」の共起が確認される例としては、「神丘の山の黄葉を今日もかも問ひたまはまし明日もかも見したまはまし」(万葉二・一五九)と「恋もなくあらしものを」(万葉十五・三七三七)とが挙げられる。前者は(並立)として、後者は否定との共起としても解することができる。

(7) 当該歌の一句目の「家」は鏡女王の家であるが、五句目の「家」については、鏡女王の家とする説と天智天皇の家とする説とがある。後者に従った場合、「家」に下接する「モ」は、異なるふたつの「家」が同じ場所にあることを示す(並立)の用法とも解することができる。なお、「大島の嶺」の在所に定説はなく、難波宮から「かなりの距離をおいた大島の嶺」(『全歌講義』)と見れば、「(スグ)近クトハユカナクトモ」せめて目の届く大島には」と(最小限度)に解する余地は残る。

『窪田評釈』は、『も』は、詠嘆」としつつも、『石木』は、非情のもの、又劣つたものとして云つてゐる」とする。なお、諸注釈書に指摘されるように、非情物としての「石木」は、「石木をも問ひ放け知らず」(万葉五・七九四)や「石木より生り出し人か」(万葉五・

八〇〇) など、憶良の表現を借りたものと推される。

(9) 小柳(二二〇〇六)は、「単数を表す確例はラの上接名詞が『娘子・子』に限られる(四〇頁)としつつ、唯一の例外として当該歌を掲げて「この『妻ら』は死人の妻一人を指すと見るのが通説」(四九頁・注四)とする。ただし、小柳氏も指摘するように、鉄野(二〇〇六)は、「妻ら」が妻以外の家族をも指すと解釈する。

(10) 「言繁き里に住ま^ずは今朝鳴きし雁にたぐひて行か^ましものを」(万葉八・一五一一)と、「我妹子に恋ひつつあらずは秋萩の咲きて散りぬる花にあら^ましを」(万葉二・二二〇)とについても、この類型に含めた。ただし、前者は、必ずしも雁になることを含意するわけではなく、後者は、「この世から消えてしまうこと」を望む類型とも解される。

【用例出典】

本稿で用例数を示した場合には、以下の資料を集計の対象とした。なお、用例の検索には、国立国語研究所(二〇二二)『日本語歴史コーパス』(Ver. 2023.3)を適宜使用した。

『万葉集』(『新編日本古典文学全集』(小学館)による)、『古事記』歌謡、『日本書紀』歌謡、『続日本紀』歌謡、『風土記』歌謡、『仏足石歌』(以上『日本古典文学大系 古代歌謡集』(岩波書店)による)、『続日本紀』宣命(北川和秀「編」)、『続日本紀宣命校本・総索引』(吉川弘文館)による)、『延喜式』祝詞(沖森卓也「編」)、『東京国立博物館蔵本 延喜式祝詞総索引』(汲古書院)に

よる)

* 『記紀』歌謡・『万葉集』中の重出歌、『日本書紀』の訓字表記の歌謡については、それぞれを用例として認めた。

* 『万葉集』については、読添え例も用例として認めた。

集計の対象外ではあるが、本文中に引用した資料につきに示す。

『後撰和歌集』(『新日本古典文学大系』(角川書店)による)、『源氏物語』(『新編日本古典文学全集』(小学館)による)

【参考文献】

浅見 徹(一九六六)『助詞の問題点』『国文学 解釈と鑑賞』(三一・一)

一・一二)、八〇・八七頁

大野 晋(一九九三)『係り結びの研究』岩波書店

工藤美紗子(一九六三)『も』という助詞の意味』『文学』(三一・一)

二)、九八・一〇四頁

栗田 岳(二〇一九)『古代日本語と現実の諸様態』清文堂

小池 俊希(二〇二二)『意志・推量の助動詞と助詞モの共起——上

代・中古における用例整理——』『日本語学論集』(一八)、一一一

六頁

————(二〇二三a)「上代における希望表現と助詞モの共起」

『萬葉』(三三五)、六四・八一頁

————(二〇二三b)「訓点資料における助詞モの用法」訓点語

学会第一二九回研究発表会(口頭発表)、二〇二三年一〇月二二

日、於東京大学

小柳 智一 (二〇〇四) 『ずは』の語法—仮定条件句— 『萬葉』 (一八九)、二五・四〇頁

—— (二〇〇六) 「上代の複数—接尾語ラを中心に—」 『萬葉』 (一九六)、三五・五一頁

鉄野 昌弘 (二〇〇六) 「作歌と文字表現—『吾等』をめぐる—」

沖森卓也ほか『編』『文字と古代日本 五 文字表現の獲得』、六八・八六頁

濱田 敦 (一九八六) 『国語史の諸問題』和泉書院

古川 大悟 (二〇一八) 「上代の特殊語法ズハについて—「可能的表現」—」 『萬葉』 (二二五)、六一・八二頁

—— (二〇一九) 「助動詞マシの意味」 『国語国文』 (八八・一)、三四・五四頁

森野 崇 (一九九七) 「古代日本語の終助詞『も』の機能」 『松学

舍大学論集』 (四〇)、八五・一〇六頁

—— (一九九八) 「奈良時代の係助詞『も』に関する考察」 『松学舍大学論集』 (四二)、四七・六九頁

山口 堯二 (一九六八) 『まし』の意味領域 『国語国文』 (三七・五)、二二・三五頁

吉田 茂晃 (一九九〇) 「万葉集における助詞『も』の文中用法」 『島大国文』 (一九)、一五・三三頁

〔注釈書類〕

青木生子ほか『編』 (一九七六・一九八四) 『万葉集』 (新潮日本古典集

成) 新潮社

阿蘇 瑞枝 (二〇〇六・二〇一五) 『万葉集全歌講義』笠間書

院

伊藤 博 (一九九五・二〇〇〇) 『万葉集釈注』集英社

稲岡 耕二 (一九九七・二〇一五) 『万葉集』 (和歌文学大系)

明治書院

沢瀉 久孝 (一九五七・一九七七) 『万葉集注釈』中央公論社

窪田 空穂 (一九四三・一九五二) 『万葉集評釈』東京堂

小島憲之ほか『編』 (一九七一・一九七五) 『万葉集』 (日本古典文学全集) 小学館

小島憲之ほか『編』 (一九九四・一九九六) 『万葉集』 (新編日本古典文

学全集) 小学館

武田 祐吉 (一九五六・一九五七) 『万葉集全注釈』 (増訂版)

角川書店

多田 一臣 (二〇〇九・二〇一〇) 『万葉集全解』筑摩書房

久松潜一『編』 (一九七三・一九七五) 『契沖全集』 (一・七) 岩波

書店

〔付記〕

本稿は、JSPS 科研費 22K10552 の助成を受けたものである。

(こいけ としき 大学院人文社会系研究科 博士課程三年・

日本学術振興会特別研究員)